

# 高等学校家庭科における教科教育の充実に向けて

## －聾学校高等部での授業実践－

北 原 麻 琴 [鹿児島県立鹿児島聾学校]

黒 光 貴 峰 [鹿児島大学教育学系(家政教育)]

### The enhancement of curriculum research and development of high school home economics: Lesson practice at a senior high deaf school

KITAHARA Makoto · KUROMITSU Takamine

キーワード：家庭科教育、特別支援教育、聾学校高等部、授業設計

#### I. はじめに

家庭科は、実践的・体験的な学習活動を通して、家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業等についての基礎的な理解と技能を養うとともに、それらを活用して課題を解決するために工夫し創造できる能力と実践的な態度の育成を目指している。少子高齢化や家庭の機能が十分に果たされていないといった状況に対応し、内容においては、家族と家庭に関する教育と子育て理解のための体験や高齢者との交流の重視、心身ともに健康で安全な食生活のため、食事の役割や栄養・調理に関する内容の充実、社会において、主体的に生きる消費者をはぐくむ視点から、消費の在り方及び資源や環境に配慮したライフスタイルの確立を目指す指導の充実など、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度の育成を目指している<sup>1)</sup>。

高等学校の家庭科においては、平成6年から男女必修となり、人間の発達と生涯を見通した生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、家庭や地域の生活を創造する能力と主体的に実践する態度の育成を目指している<sup>2)</sup>。高等学校家庭科の課題としては、平成15年度の学習指導要領改訂において、家庭科必修科目として家庭基礎(2単位)の科目が設置されたことにより、それまでの4単位必修から家庭科の履修単位の減少が問題となっており、今後、少ない時間数の中で、どのように指導を充実させていくのが課題である<sup>3) 4) 5)</sup>。

特別支援教育の現状としては、特別支援学校な

らびに特別支援学級に在籍している幼児児童生徒数が増加する傾向にあり、通級による指導を受けている児童生徒数も増加している<sup>注1)</sup>。障害のある幼児児童生徒をめぐる動向として、障害の重度・重複化や多様化、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)等の幼児児童生徒への対応や早期からの教育的対応に関する要望の高まり、卒業後の進路の多様化、ノーマライゼーションの理念の浸透などがみられる。こうした状況に鑑み、幼児児童生徒の個々のニーズに柔軟に対応し、適切な指導及び必要な支援を行うという観点から、平成17年12月に特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申)が取りまとめられた。この答申における提言を踏まえ、平成18年に学校教育法が改正され、平成19年度より、従来の盲学校、聾学校及び養護学校は、複数の障害種別を教育の対象とすることのできる特別支援学校に転換されるとともに、特別支援学校は、小・中学校等の要請に応じて、これらの学校に在籍する障害のある幼児児童生徒の教育に関し必要な助言又は援助を行うよう努めることが規定された。また、幼稚園、小学校、中学校及び高等学校等においても、障害のある幼児児童生徒に対し、障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行うことが規定された。今後、特別支援教育においては、幼稚園、小学校、中学校、高等学校等の教育段階ならびに各教科における障害のある幼児児童生徒に対する適切な指導及び必要な支援の充実が課題である。

高等学校家庭科における先行研究では、食生活<sup>6)</sup>

7) 8)、住生活<sup>9)</sup>、消費生活<sup>10) 11)</sup> 分野での授業実践、家庭生活<sup>12)</sup>、衣生活<sup>13)</sup>、保育<sup>14)</sup> 分野での教材開発、特別支援教育における先行研究では、聾学校における言語活動の充実に向けた授業実践<sup>15)</sup>、インターネットを活用した共同実験型学習<sup>16)</sup> の報告が行われている。特別支援学校における各教科での授業実践研究<sup>17) 18) 19)</sup> はみられるが、家庭科での授業実践報告はみられない。

以上より、本報告では、家庭科教育ならびに特別支援教育の充実に向けて、障害のある児童生徒に対する家庭科での授業実践報告を行い、適切な指導と必要な支援の充実を図っていくことを目的としている。

研究方法は、聴覚障害のある生徒を対象とした高等学校家庭科での授業開発である。授業開発に向けて、高等学校家庭科ならびに特別支援学校の実情を整理し、生徒の実態に応じた授業設計を行った。具体的には、高等学校学習指導要領解説家庭編、特別支援学校学習指導要領解説の整理を行い、高等学校家庭科共通教科家庭総合において、聴覚障害のある生徒（聾学校高等部）に対応した授業設計を行った。

## Ⅱ. 結果

### 1. 高等学校家庭科について

高等学校家庭科の教科の目標は、「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する実践的な態度を育てる」ことである。教科の科目編成としては、各学科に共通する教科「家庭」と、主として専門学科において開設される教科「家庭」に分けられる。前者は、家庭基礎、家庭総合、生活デザインの3科目、後者は、生活産業基礎、課題研究、生活産業情報、消費生活、子どもの発達と保育、子ども文化、生活と福祉、リビングデザイン、服飾文化、ファッション造形基礎、ファッション造形、ファッションデザイン、服飾手芸、フードデザイン、食文化、調理、栄養、食品、食品衛生、公衆衛生の20科目から編成されている。

### 2. 聴覚障害のある生徒の授業における配慮事項

聴覚障害をもつ生徒の授業における配慮事項としては、(1) 生徒の興味・関心を生かして、積極的な言語活動を促すとともに、抽象的、論理的な思考力の伸長に努めること、(2) 生徒の言語力等に応じて、適切な読書習慣や書いて表現する力の育成を図り、主体的に情報を獲得し、適切に選択・活用する態度を養うようにすること、(3) 生徒の聴覚障害の状態等に応じて、指導内容を適切に精選し、基礎的・基本的な事項に重点を置くなどして指導すること、(4) 補聴器等の利用により、生徒の保有する聴覚を最大限に活用し、効果的な学習活動が展開できるようにすること、(5) 視覚的に情報を獲得しやすい教材・教具やその活用等を工夫するとともに、コンピュータ等の情報機器などを有効に活用し、指導の効果を高めるようにすること、(6) 生徒の聴覚障害の状態に応じ、音声、文字、手話等のコミュニケーション手段を適切に活用して、意思の相互伝達が正確かつ効率的に行われるようにすること、が挙げられている。

### 3. 授業設計

1、2を踏まえ、聾学校校高等部における家庭科の授業設計を行った。

#### 1) 教材観

本授業は、共通教科の家庭総合(4) 生活の科学と環境、ア 食生活の科学と文化 (ウ) 食生活の文化に関する内容である。ここでは、食生活の文化的な側面について、行事食や郷土料理及びその由来、地域の気候風土で培われた伝統的な加工食品などに関心をもたせ、それらの中に生活の知恵が活かされていること、それぞれの地域で傳承されてきた行事食や日常食を取り上げ、調理実習を通して食文化を主体的に繼承することの意義について考えさせる、ことがねらいとして挙げられている。また、内容の取り扱いとしては、(1) 実生活に活用することができるよう、実験・実習を中心とした指導を行う、(2) 食生活の文化に関心をもたせるとともに、必要な知識と技術を習得して安全と環境に配慮させる、(3) 中学校での学習を踏まえ、生徒や地域の実態を考慮し、高校生の食生活の自立に向けて毎日の食事に活用できる

ことや、実践への意欲を高める題材を選択すること、が挙げられている。

それらを踏まえ、本授業では、以下のことに配慮し、授業設計を行った。

- (1) 実生活に活用することができるようにするため、身近な題材を選択し、調べ学習や発表活動など問題解決学習的な活動を中心とした指導を行う。
- (2) 食生活の文化に関心をもたせ、必要な知識を習得させるため、生徒にとって分かりやすい郷土料理または行事食を取り上げる。
- (3) 中学校での学習を踏まえ、これからの学習意欲を高める題材を選択するため、事前にアンケート調査を行い、生徒の実態を把握する。
- (4) 生徒の興味・関心を生かし、積極的な言語活動を促すため、ワークシートは自由記述形式にし、発表活動では発表と質問の時間を設定する。また、抽象的、論理的な思考の伸長に努めるため、指導計画、学習内容の関連付けを行う。
- (5) 生徒の言語力等に応じた適切な読書習慣、書いて表現する力の育成を図り、情報を主体的に獲得し、適切に選択・活用する態度を養うため、調べ学習ではパソコンを用いて書き写すだけでなく、重要なところを判断し、まとめるよう配慮する。
- (6) 生徒の聴覚障害の状態等に応じて、指導内容を適切に精選し、基礎的・基本的な事項に重点を置くため、学習内容に系統性をもたせ、つながりをもって基礎的・基本的な学習が行えるように配慮する。
- (7) 補聴器等の利用により、生徒の保有する聴覚を最大限に活用し、効果的な学習活動が展開できるようにするため、「聞きながら見る活動」と「話す活動」と場面を分けて設定する。
- (8) 情報を視覚的に獲得しやすくするため、学習に関する教材・教具やその活用等を工夫し、コンピュータ等の情報機器などを有効に活用し、指導の効果を高めるように配慮する。
- (9) 生徒の聴覚障害の状態に応じ、音声、文字、手話等のコミュニケーション手段を適切に活用して、意思の相互伝達が正確かつ効率的に行われるようにするため、生徒にコミュニケーションの方

法を選択させる。

## 2) 生徒観

対象の生徒は、本校の中学部から入学してきた生徒が2名、他県の聾学校から入学してきた生徒が1名である。生徒の実態としては、教師や他の生徒とコミュニケーションを行う際は、口話と手話を併用するが、質問の内容を理解できず、質問の意図に合わない回答をすることもある。3名とも発音は明瞭であり、聞きとりやすい。

家庭科の授業では、3名とも授業態度は良好で、積極的に発言を行い、また、他の生徒の意見を傾聴しようとする姿勢もみられる。食生活に関する事前のアンケート調査では、「食生活の分野で学習してみたいことはどのようなことですか」という質問に対し、「食物の栄養を詳しく知りたい」、「日常食のバランスについて知りたい」、「色々な栄養の入ったレシピについて知りたい」といった栄養に関する学習に興味・関心が高い傾向がみられた。「調理実習は好きですか」という質問に対しては、3名とも「好き」と回答しており、調理実習に対する意欲が高いことがうかがえる。「中学校技術・家庭科（家庭分野）で郷土料理や行事食に関する学習を経験しましたか」という質問に対しては、「経験した」と回答した生徒は1名だけであった。また、「調理実習を経験しましたか」という質問に対しては、「経験した」と回答した生徒は1名だけであった。郷土料理の意味を正しく答えられた生徒は、3名中2名であった。鹿児島県の郷土料理の名称は3名とも回答できたが、その名称や由来を回答できた生徒はみられなかった。

それらを踏まえ、本授業では、以下のことに配慮し、授業設計を行った。

- (1) 聴覚口話法<sup>注2)</sup>を取り入れ、音声言語だけでなく、話し手の表情や口の動きから相手の話を読み取らせるため、教師の立ち位置に留意し、生徒が注目しているか確認してから、聞き取りやすい大きさの声ではっきりと話すよう配慮する。
- (2) 聴覚障害という同じ障害でも、生徒によって聞こえの状態は異なり、それぞれ得意なコミュニケーション手段を用いて生徒の保有している聴覚を最大限に活用するため、生徒に合ったコミュニ

ケーションを行うことを配慮し、口話と併せ、必要に応じて手話や指文字、筆談を用いながら説明を行うよう配慮する。

(3) 聴覚障害のある生徒は、相手の話を読み取る際、話し手の表情や口の動きから言葉を想像する。そのため、似ている口型と間違えて捉えてしまう場合があり、そのことで辞書等での意味の調べができず、説明や質問が分からないままになっている場合がある。正しい説明や質問を理解させるため、教科書や授業中に使用する漢字の読み、言葉の意味の確認を丁寧にを行う、視覚情報として板書に漢字の読みや言葉の意味を記入するなど板書計画の配慮、生徒がメモを取りやすいワークシートの作成など教材を配慮する。

### 3) 指導観

生徒3名中2名は、郷土料理または行事食を調理したことがあるものの、それらの由来については、全く知らないと回答していた。そこで、授業計画では、郷土料理、行事食にどのような由来があるのかを学習し知識を深めた上で、生徒の興味・関心が高い栄養の学習、調理実習につなげた。

また、生徒らは、1学年に7名、家庭科の授業では3名のグループで学習を行っているため、一緒に学習する生徒が少なく、他の人の発表を聞くという経験が少ない。クラスメイトの意見を傾聴しようとする姿勢はあるものの、聞き逃したり、見逃したりしてしまうことがある。そのため、調べ学習をしたことをクラスメイトに向けて発表し、発表を聞いてから質問を行い、回答するという流れをつくることで、発表を聞き逃したり、見逃したりしないような学習状況を設定した。

それらを踏まえ、本授業では、以下のことに配慮し、授業設計を行った。

(1) 生徒の興味・関心、知識・理解が深まるよう、授業計画を工夫する。本単元では、郷土料理、行事食の材料とそれらが採れる産地の気候風土を関係付けることで、日本独自の食文化を継承することの重要性や食文化を大切にしていく姿勢、様々な地域や外国の文化に興味をもてるよう配慮する。

(2) 生徒の主体的な学習活動を図るため、調べ学習では、パソコンを使った情報収集、発表では、

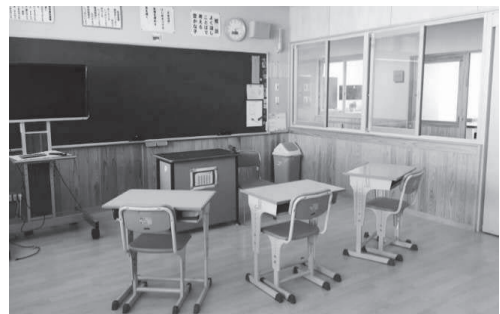
教師が生徒のワークシートを代読するのではなく、生徒自身が説明を行う場面を設定する。その際、インターネットの活用、視覚的な文字情報を表示する電子黒板、書画カメラの活用、などICTの導入を図る。

(3) 言語活動の充実を図るため、発表したことに関する質問へ答えることで「話すこと」、発表を聞くことで「聞くこと」、調べたことの要点をワークシートにまとめることで「書くこと」、調べ学習でまとめたことを発表することで「読むこと」の場面を設定する。

### 4) 授業の環境設定

授業の環境設定としては、発表の時にモニターを使い、クラスメイトに発表するため、モニターと発表者が聞き手から見えるように発表者の位置と聞き手の座る位置に配慮する。

特に、生徒らは聴覚を活用しながら話し手の表情を含め、話し手の口の動きからも話を読み取るため、机を馬蹄形に配置して、全体が見渡せるよう工夫する。



授業の環境設定

### 5) プレ授業の様子

以上、1)～4)を踏まえ、プレ授業を行った。

導入時、生徒は、郷土料理または行事食について、パソコンを使った調べ学習を行った。生徒3名とも日常的にインターネットを利用しており、調べたい情報を素早く収集することができてい



た。

展開時、調べたことをワークシートにまとめる作業では、調べたことの要点をまとめて、ワークシートに書く際、漢字や助詞の間違いがないか生徒と一緒に確認した。要点をまとめる作業では、生徒3名とも簡潔にまとめることが苦手な様子うかがえたが、教師が声掛けを行うことで、後半はスムーズにまとめることができていた。



パソコンを使った調べ学習の様子



調べたことをワークシートにまとめている様子


生徒Aは、1月1日に食べられるおせち料理について、生徒Bは、プレ授業の前に取り扱った柏餅について、生徒Cは、滋賀県の郷土料理である鮎鮎が元になったとされ、現在では日常的にも食べられている寿司について調べた。

### 行事食の由来調べ

名称：おせち料理

いつ食べるか：正月（一月一日） 元旦

由来：弥生時代に伝わってきた。  
作物の収穫を季節ごとに木杵（きね）に感謝し、生活の節目を祝っていた。  
大漁や豊作を願い、自然の恵みに感謝して食べた料理を「節供料理」といいます。  
白飯のちりや子孫繁栄を願う緑豆粥、紅白のまきばら、紅豆の出しの形に似ていることから、赤白は魔除け、白色は清浄と神聖を表します。




生徒Aのワークシート

### 行事食の由来調べ

名称：木白餅

いつ食べるか：5月5日

由来：木白の木は新芽が出ないで葉が落ちません。  
このことから「子供が生まれるまで親は死なない」という思いにつながり、家が繁栄する「子孫繁栄」という縁起を担いだという。



生徒Bのワークシート

### 行事食の由来調べ


名称：お寿司

いつ食べるか：自由に食べれる

由来：現代で多く使われる「寿司」は、江戸末期に作られた字で「鮓（すし）」という魚の干し物の意味の「鮓」が、魚の干し物の意味の「鮓」に由来する。

「鮓（すし）」は、魚の干し物の意味の「鮓」に由来する。

「鮓（すし）」は、魚の干し物の意味の「鮓」に由来する。

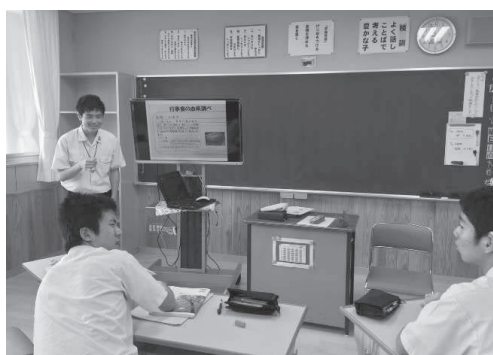


生徒Cのワークシート

終末時、モニターを使つての発表は、生徒3名ともこれまで経験したことがなかったものの、指示棒を使ったり、手話で説明したり、それぞれの得意な方法を使つて発表し、クラスメイトの質問にも的確に答えることができていた。

## 学習指導案（本時）

過 程	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	生 徒 へ の 配 慮 事 項	教 材・教 具
導 入 (5 分)	1 始めのあいさつをする。 2 前時の学習を振り返る。 3 本時の学習目標を確認する。 郷土料理、行事食の由来について調べたことをまとめて発表しよう。	○あいさつ、服装をきちんとさせる。 ○前時の学習を確認させる。 ・前時のワークシートを活用して振り返ることをつながり意識させて学習し取り組めるようにする。 ○生徒に学習内容を確認させる。 ○本時の学習の流れを知らせる。 ・発表を聞いた後に、質問の時間があることを説明する。	教材観(6)生徒の聴覚障害の状態等に応じて、指導内容を適切に精選し、学習内容に系統性をもたせ、つながりをもって基礎的・基本的な学習が行えるように配慮する。 教材観(1)実生活に活用することができるようにするために、身近な題材を選択し、調べ学習や発表活動など問題解決学習的な活動を中心とした指導を行う。 指導観(2)食生活の文化に関心をもたせ必要な知識を習得させるために、生徒にとって分かりやすい郷土料理、行事食を取り上げる。	・実習ノート
展 開 (40分)	4 パソコンを使ってそれぞれの由来について調べワークシートにまとめる。 5 調べたことを発表する。	○インターネットを使って調べ相手に伝わりやすいように箇条書きにまとめる。 ・インターネットで調べたことの要点を抜き出して記述できるように声掛けを行う。 ・ワークシートに記入する際は、文法的な誤りがないか確認させる。 ○発表する前に発表をするときの話し手、聞き手のポイントを説明する。 ○それぞれの得意なコミュニケーション方法を選択して、発表する。 ・質問や回答は得意なコミュニケーション方法が異なるクラスメイト3名で共通理解できるように、意志の伝達が正確かつ効率的に行われるようにするため、「質問」、「回答」で区切りながら進める。	教材観(8)視覚的に情報を獲得しやすくするためにコンピュータ等の情報機器を活用し、指導の効果を高める。 指導観(2)生徒の主体的な学習活動を図るため、調べ学習の際はパソコンを使った情報収集、発表の際は、視覚的な文字情報としてワークシートをモニターに表示し生徒が説明を行うなどICTの導入を図る。 教材観(4)生徒の興味・関心を生かして積極的な言語活動を促すためワークシートは自由記述形式にし、発表活動では発表と質問の時間を設定する。 指導観(3)発表したことに関する質問へ答えることで話すこと、発表を聞くことで聞くこと、調べ学習で調べたことの要点をまとめてワークシートに書くことで書くこと、調べ学習でまとめたことを発表することで読むことの言語活動の充実を図る。 教材観(9)生徒の聴覚障害の状態に応じ、音声、文字、手話等のコミュニケーション手段を適切に活用して、意志の相互伝達が正確かつ効率的に行われるようにするため生徒にコミュニケーションの方法を選択させる。	・ワークシート ・パソコン ・テレビ ・デジタルカメラ
終 末 (5分)	6 本時の学習のまとめを行う。 7 次時の学習を聞く。 8 終わりのあいさつをする。	○ワークシートに自己評価を記入させる。 ○次時の学習内容を伝える。 ○あいさつ、服装をきちんとさせる。	教材観(5)生徒の言語力等に応じて、適切な読書習慣や書いて表現する力を育き、主体的に情報を獲得し適切に選択・活用する態度を養うために調べ学習ではパソコンを用いてただ書き写すだけでなく重要なところを判断しまとめるように配慮する。	・ワークシート



話し合い活動の様子



ICTの活用の様子

## 6) 授業後の生徒の感想

授業後の生徒の感想を調べるため、生徒3名に対してヒアリング調査を行った。調査時期は、平成27年7月である。

授業で「郷土料理または行事食についての興味・関心が高まったか」という質問に対しては、3名とも「興味・関心が高まった」という回答がみられた。その理由については、「それぞれの料理によって込められている願いが違った」ということや「思っていたよりも、おもしろい由来だったから」という意見がみられた。また、「郷土料理または行事食の由来を調べたり、クラスメイトの発表を聞いて知ったりするのはおもしろかった」という回答がみられた。

授業の感想では「発表形式の授業は、自分の意見をクラスメイトに伝えたりすることが聞いているだけの授業より楽しい」という回答がみられた。しかし、「発表の授業は、発表するときに文章を考えるのが苦手だから、好きでない」という意見もみられた。

## Ⅲ. 今後の課題

本報告では、家庭科教育ならびに特別支援教育の充実に向けて、高等学校家庭科共通教科家庭総合において、聴覚障害のある生徒に対応した授業設計を行った。今後の課題としては、教材観、生

徒観、指導観から聴覚障害のある生徒への配慮事項の整理を行ったが、プレ授業を行ってみて、それら配慮事項をどのように形にしていくのか具体的な提案の必要性がみられた。ICTを活用することで、生徒の主體的な学習活動の充実が図れたが、得られる情報が多くなりまとめることの難しさ、操作性が高く安価で汎用性のある教材の必要性、教科書と対応した教材の必要性なども挙げられた。また、話し合いや発表する機会を設定することで、言語活動の充実が図れたが、生徒により個人差がみられる、効果的な学習支援を行うためには日頃から話し合い、発表する活動を取り入れるなど学校全体で取り組んでいく必要もみられた。今後は、それらの課題を踏まえ、具体的な教材、授業の開発、そして、有効性の検証を踏まえた実践を行っていききたい。

## 謝辞

本研究を進めるに当たり、ご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

注1) 通級による指導は、平成5年の学校教育法施行規則一部改正により制度化され、それ以降児童生徒数は増加してきている。平成23年5月1日現在、義務教育段階において特別支援学校及び小学校・中学校の特別支援学級の在籍者並びに通級による指導を受けている児童生徒の総数に占める割合は約2.7%である。学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、高機能自閉症等、学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒数については、文部科学省が平成24年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果より、約6.5%程度の割合で通常の学級に在籍している。

注2) 聴覚口話法とは、聴覚を活用しながら言葉(音声言語)を習得させ、習得した発音や話し言葉で話し、聴覚活用と読話(表情を含め、話し手の口の動きから相手の話を読み取る)で情報得る方法のことである。

## 参考文献

- <sup>1)</sup> 中央教育審議会.(2008). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)
- <sup>2)</sup> 文部科学省.(2010). 高等学校学習指導要領解説 家庭編
- <sup>3)</sup> 野中美津枝・荒井紀子・鎌田浩子ら.(2011). 高等学校家庭科の履修単位数をめぐる現状と課題－16都道府県の実態調査を通して－. 日本家庭科教育学会誌, 54(3), 175-184
- <sup>4)</sup> 野中美津枝・荒井紀子・鎌田浩子ら.(2012). 高等学校家庭科の履修単位数をめぐる現状と課題－21都道府県の家庭科教員調査を通して－. 日本家庭科教育学会誌, 54(4), 226-235
- <sup>5)</sup> 野中美津枝・亀井佑子・新山みつ枝ら.(2015). 高校家庭科男女必修後20年の履修環境の検証－関東地区4都県の実態調査を通して－. 日本家庭科教育学会誌, 58(2), 79-88
- <sup>6)</sup> 半田彩実.(2015). 高等学校家庭総合における短歌を教材とした行事食に関する授業の有効性. 日本家庭科教育学会誌 58(1), 36-41
- <sup>7)</sup> 土田清香, 柴英里, 菊池るみ子, 高等学校家庭科における食生活の授業実践. 高知大学教育実践研究 (29), 131-139
- <sup>8)</sup> 萱島知子, 高橋美与子, 鈴木明子.(2013). 家庭科における食情報に関する授業開発: 高等学校「家庭基礎」における生徒の記述分析から. 日本教科教育学会誌 36(3), 49-57
- <sup>9)</sup> 小川裕子, 中島喜代子, 石井仁, 田中勝, 杉浦淳吉, 小川正光.(2014). 中学校, 高等学校家庭科における住居領域授業実践の実態からみた課題と提言. 日本家庭科教育学会誌 57(1), 3-13
- <sup>10)</sup> 田中由美子, 横田明子.(2013). 多重債務予防の消費者教育: 高等学校家庭科における授業計画と教育効果. 消費者教育 33, 225-233
- <sup>11)</sup> 三宅元子.(2014). 高等学校家庭科における消費者教育への「アサーション」導入の検討. 日本家政学会誌 65(9), 523-530
- <sup>12)</sup> 池田有香, 増淵哲子.(2013). 高等学校家庭科における「家族・家庭生活」及び「保育」教材の研究. 北海道教育大学紀要. 教育科学編 64(1), 349-364

- <sup>13)</sup> 小松恵美子, 駒津順子, 森田みゆき.(2014). 染色教材開発のための家庭科実習授業への高校生の意識の分析. 北海道教育大学紀要. 教育科学編 64 (2), 225-231
- <sup>14)</sup> 細谷里香, 日口由美子.(2012). 高校家庭科「保育」の授業における視聴覚教材活用の有効性. 滋賀大学教育学部紀要. 教育科学 (62) ,127-135
- <sup>15)</sup> 藤本裕美子, 山道真純, 齋木信也.(2013). 聾学校における言語活動の充実: 外国語活動・外国語の授業を通して. 特別支援教育 (50) ,16-19
- <sup>16)</sup> 中村好則, 黒木伸明.(2005). 聾学校間のインターネットを活用した共同実験型学習の実践と評価. 数学教育学会誌 46 (1) ,71-78
- <sup>17)</sup> 中村好則, 黒木伸明.(2005). 聾学校の数学指導改善のための Web 教材の開発と実践. 数学教育学会誌 45 (3) ,91-98
- <sup>18)</sup> 森弘文, 加藤靖佳.(2015). 聴覚障害児が音楽授業場面で感じる楽しさについて. ろう教育科学 56 (2) , 69-81
- <sup>19)</sup> 内田匡輔.(2008). 聴覚特別支援学校(聾学校)における体育実技授業について. 発育発達研究 ,98